

学生の外的要因と内的要因に着目する
「外国語の理解」「外国語科指導法」に関する一考察
A Study of “Comprehension of Foreign Language” and “Teaching
Method of Foreign Language for the Elementary School”
Based on External and Internal Factors of Learners

熊田 岐子・岡村 季光
 Michiko Kumada, Toshimitsu Okamura

要旨

本研究は、小学校に「外国語活動」「外国語」が導入されることを見据え、学生の外的要因（英語運用力・授業力）だけでなく、内的要因（自尊感情の低さ・他者理解の必要性・情動的反応性の克服）にも着目した研究である。本稿では、熊田・岡村（2017）において示唆された英語スピーキング不安と自尊感情の関連について検討を行った。結果として、対人不安傾向尺度の下位尺度である「情動的反応性」が現在の英語スピーキング不安に有意に影響を及ぼしていることが明らかになった。また、将来の英語スピーキング不安得点については「情動的反応性」に加え、「自尊感情」も有意に影響を及ぼしていることが明らかになった。さらに、「自尊感情」と将来の英語スピーキング不安には「情動的反応性」が媒介する間接効果も見出された。上述の事象を克服するために、近藤（2010）の「基本的自尊感情を育む共有体験」に着目すること、大学カリキュラムマネジメントにより他教科と連携することを提案した。

キーワード：外国語活動・外国語、英語運用力、英語スピーキング不安、自尊感情、情動的反応性

1. はじめに

日本の外国語教育の強化を目指して、3・4年生に「外国語活動」が、5・6年生に「外国語」が平成30年度から移行期間に入り、平成32年度から全面实施されることとなった。教員養成を行う大学側にとっても、教育現場での外国語教育整備と同様に、「外国語の理解（教科及び教科の指導法に関する科目）」「外国語科指導法（教科及び教科の指導法に関する科目）」の整備が急務となっている。上記2科目の指針として、文部科学省委託事業「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」が行われている。外国語コア・カリキュラムとしての提案である。「小学校教員養成課程 外国語（英語）コア・カリキュラム（以下、コア・カリキュラム）」の全体目標は、「・授業設計と指導技術の基本を身に付ける（p.70）」「・小学校において外国語活動・外国語の授業ができる国際的な基準であるCEFR B1レベルを身に付ける（p.70）」とされている。いわゆる教師を志す学生の外的要因「英語運用力・授業力」に焦点が絞られている。しかしながら、熊田・岡村（2017）では、内的要因—自尊感情の低さ—が、英語スピーキング不安の尺度作成の過程で表れた。そこで、教師としての資質・能力に関わる内的部分の養成も必

要ではないだろうか」と仮定することができる。Brown (1973) は、“self-knowledge, self-esteem, and self-confidence of the language learner could have everything to do with success in learning a language (p.233)” と本研究に通じる予測を立てている。さらに言えば、清田 (2010) によれば、自尊感情は学習の動機づけに関わると考えられている。本稿では、外国語学習不安（英語スピーキング不安）と「自尊感情」の低さという内的要因に着目して、熊田・岡村 (2017) を詳細に検討することとする。

2. 研究背景

2.1 外国語学習不安研究から英語スピーキング不安研究へ

学生の内的要因に通じる外国語学習不安に関する研究は、MacIntyre and Gardner (1991)によれば、様々な方法でなされてきている。外国語学習不安研究が始められた当初は、回答よりも疑問点ばかり浮かんできたとされる。何かしらの状況下で不安になる傾向があるとされる「特性不安 (“trait anxiety”)」、 「特性不安」とストレスなどの状況的アプローチから判断される「状態不安 (“state anxiety”)」、 「状態不安」の代わりに使用されるアプローチである「特定の状況下での不安 (“situation specific anxieties”)」に中心が置かれていた。最後の「特定の状況下での不安」には、パブリック・スピーキングや筆記試験等での反応が測定された。それぞれの不安状態を測定する尺度が開発されている。これらの尺度によって、不安が検討されてきたが、外国語学習不安に関する貢献をしたのは、熊田・岡村 (2017) でも応用したHorwitz et al. (1986)によるthe Foreign Language Classroom Anxiety Scale (以下、FLCAS) である。外国語学習不安はスピーキング不安から起きる (Young, 1991) との言葉から、熊田・岡村 (2017) は、英語スピーキング不安に着目した。英語スピーキング不安の検証は、「聞く」「読む」「書く」にも連携し、日本が目指す国際理解教育に貢献できると考えたからである。熊田・岡村 (2017) において、英語スピーキング不安を観察したところ、その尺度作成の過程において、教職希望者の調査協力者の自尊感情が低いことも同時にあきらかになった。また、清田 (2010) が、英語学習において自尊感情がどのような働きをするかの検証を行っているように、英語学習において自尊感情が関係することが示唆されている。また、実際に教育現場では、不安やストレスを下げて自尊感情を高める方法・尺度が検討されている (e.g., 荒木, 2011)。したがって、自尊感情に次項では着目したい。

2.2 自尊感情

近藤 (2010) によると、自尊感情の構造は、これまでの先行研究によると「基本的自尊感情 (basic self esteem)」と「社会的自尊感情 (social self esteem)」の2つの領域に分かれる。「基本的自尊感情」とは、生きることに価値を見いだせるかに関する自尊感情であり、「社会的自尊感情」とは、プラスの評価や勝利などの環境によって発達していく。さらに、この2つの自尊感情は、4つのタイプを生むという。最も良いとされるのが、「基本的自尊感情」と「社会的自尊感情」がバランスよく形成されている場合である。ほかの3つのタイプは、「社会的自尊感情」が育っていない場合、「基本的自尊感情」と「社会的自尊感情」が両方とも揃っていない場合、「社会的自尊感情」が肥大化している場合である。それぞれの自尊感情の欠如を補うには、その場合に適した教育が必要となってくるというのである。それでも、2つの領域を持つ自尊感情を育むには、「役割や出番を与えて、そこでの成功体験を積み重ねることや、少しでも良い結果が出たときには、ほめたり評価したりすることで即効的に高めることができる (近藤, 2010: 5)」という。

また、自尊感情は、自分が他者から受容されている (拒否されている) 程度を示す主観的指標 (ソシオメーター)

(リアリー、2001) という側面がある。すなわち、自尊心が高まるのは自分が他者から認められていることを表し、自尊心が低くなるのは他者からの承認がないということである。

さらに、近藤 (2010) では、最終的に「基本的自尊感情を育む共有体験 (p.141)」について論じられている。他者との「共有感」という他者理解と関連する共有体験についての検証である。例えば、英語授業においては、クラスメイトが自分の英語を笑うのではないかなどが気になる傾向は否めない。つまり、クラスメイトによる他者理解が必要であり、発表する本人にも他者が発表したときに温かく認めることができる心が必要になってくる。したがって、自尊感情と他者理解は、切り離せないものであり、自尊感情を高めるには、他者理解が必要になってくることが明らかになってきた。したがって、本研究では、学生の内的要因とは、まず、自尊感情の低さ・他者理解の必要性と定義することとする。

2. 3 教師の資質・能力

これからの「外国語の理解」「外国語科指導法」は外的要因である英語運用力・授業力に重点が置かれる可能性が高く、小学校教師自身の内的要因である自尊感情・他者理解を重視できないのではないだろうか。しかし、教育職員養成審議会 (1999) の「教員に求められる資質能力」とは、「地球的視野に立って行動するための資質能力」「変化の時代を生きる社会人に求められる資質能力」「教員の職務から必然的に求められる資質能力」である。特に、「変化の時代を生きる社会人に必要な資質能力」として、「課題解決能力」「人間関係」が挙げられているが、それらには自尊感情や他者理解に関連すると考えられる。また、これからの小学校教員に求められる資質能力は以下のとおりである。

- ◆これまで教員として不易とされてきた資質能力に加え、自律的に学ぶ姿勢を持ち、時代の変化や自らのキャリアステージに応じて求められる資質能力を生涯にわたって高めていくことのできる力や、情報を適切に収集し、選択し、活用する能力や 知識を有機的に結びつけ構造化する力などが必要である。
- ◆アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善、道徳教育の充実、小学校における外国語教育の早期化・教科化、ICTの活用、発達障害を含む特別な支援を必要とする児童生徒等への対応などの新たな課題に対応できる力量を高める必要がある。
- ◆「チーム学校」の考えの下、多様な専門性を持つ人材と効果的に連携・分担し、組織的・協働的に諸課題の解決に取り組む力の醸成が必要である。(文部科学省、2016：4)

自律性や多岐に渡る授業力、コミュニケーション能力が必要だと考えられるが、どの項目にも、教員としての自尊感情の重要性、児童を支えるための他者理解に繋がっている。したがって、教職を志す学生の内的要因の養成は不可欠だと言える。

3. 研究課題

本稿は、小学校教職課程に所属する学生が「外国語活動」「外国語」を担当するときに必要な内的要因に焦点を絞った検証を行う。そこで、以下の研究課題を設定した。

研究課題1 母語の状態での自尊感情と英語スピーキング不安は、どの部分がどのように関連するのか。

4. 方法

4.1 調査協力者

熊田・岡村（2017）と同様の調査協力者であり、小学校教職課程に所属し、かつ、将来、小学校教員が英語科を教授することを想定した課外授業「小学校英語指導者プログラム」を受講した大学2年生から4年生の78名（男47、女30、性別不明1）であった。

4.2 調査手続き

4.1で示した調査協力者を対象に、「小学校英語指導者プログラム」の初回に、熊田・岡村（2017）で示した尺度が印刷された質問用紙を配付し、一斉実施及び回収を行った。

なお、調査手続においては倫理的配慮を行った。具体的には、調査用紙冒頭に当該調査の内容に関しては授業とは関係ないこと、結果の処理は全て統計的に処理され個人を特定する形で公表しないこと、調査への回答は自由意志であり調査に拒否しても個人の不利益になることは決してないことを明記し、調査実施前にも口頭で上述の説明を行ったうえで、実施した。

5. 結果

5.1 英語スピーキング不安に及ぼす諸要因の検討

熊田・岡村（2017）は、各英語スピーキング不安尺度、対人不安傾向尺度の「否定的評価懸念」、「情動的反応性」、「対人関与の苦痛」、自尊感情尺度との関係において、現在と将来の英語スピーキング不安に高い正の相関、各英語スピーキング不安と「否定的評価懸念」、「情動的反応性」及び「対人関与の苦痛」に中程度の正の相関、各英語スピーキング不安と「自尊感情」は中程度の負の相関がみられた。

本研究では、英語スピーキング不安に及ぼす諸要因の検討を行った。まず、現在の英語スピーキング不安について、現在の英語スピーキング不安得点を従属変数、「否定的評価懸念」、「情動的反応性」、「対人関与の苦痛」及び「自尊感情」を独立変数としたステップワイズ法重回帰分析を行った。その結果が表1に示されている。分析の結果、「情動的反応性」（ $\beta = .55$ ）のみが予測変数として有意（ $R^2 = .30$, $p < .001$ ）であった。また、将来の英語スピーキング不安得点についても同様の分析を行った。その結果、「情動的反応性」（ $\beta = .42$ ）及び「自尊感情」（ $\beta = -.22$ ）が予測変数として有意（ $R^2 = .31$, $p < .001$ ）であった。

さらに、「自尊感情」と将来の英語スピーキング不安には「情動的反応性」が媒介していることが考えられたた

表1 英語スピーキング不安の回帰分析

	英語スピーキング不安			
	現在		将来	
	β	t	β	t
情動的反応性	.54	5.67***	.42	3.74***
自尊感情			-.22	1.99*
R^2	.30		.31	
F	32.10	***	15.47	***

* $p < .05$, *** $p < .001$

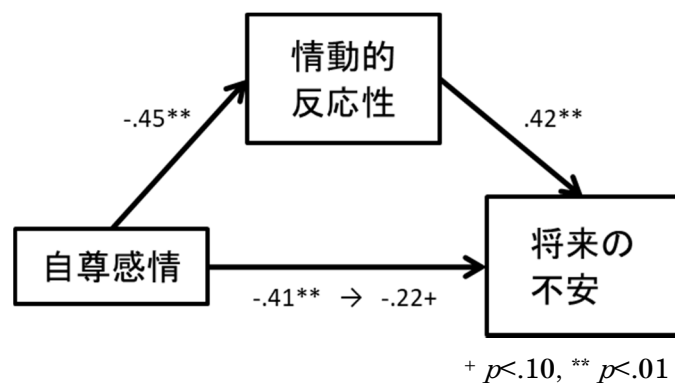


図1 将来の英語スピーキング不安の間接効果

め、英語スピーキング不安と「自尊感情」に「情動的反応性」が媒介しているモデルを仮定し、ブートストラップ法（リサンプリング回数は2000回）を用いて間接効果（媒介効果）の95%信頼区間を算出した。その結果が図1に示されている。分析の結果、“自尊感情→情動的反応性→英語スピーキング不安”の標準化した間接効果の95%信頼区間は-.14～-.53（標準化した点推定値は-.29）であり、有意な間接効果（ $Z = -3.05$, $p < .01$ ）が認められた。

6. 考察

6.1 自尊感情と情動的反応性

本研究の目的は、小学校教職課程に所属する学生が外国語活動・外国語を担当するときに必要な内的要因に焦点を絞った検証を行うことであった。英語スピーキング不安に及ぼす諸要因の検討を行った結果、対人不安傾向尺度の下位尺度である「情動的反応性」が有意に影響を及ぼしていることが明らかになった。また、将来の将来の英語スピーキング不安得点については「情動的反応性」に加え、「自尊感情」も有意に影響を及ぼしていることが明らかになった。さらに、「自尊感情」と将来の英語スピーキング不安には「情動的反応性」が媒介する間接効果も見出された。これは、自尊感情の低さが、他者から見られることへの不安から、顔が赤くなる、ドキドキするなどの情動的反応を懸念し、結果、将来の英語スピーキング不安につながる可能性が考えられる。それ故、近藤（2010）が指摘する、「基本的自尊感情を育む共有体験」を英語授業内で行えるようにすることが重要であろう。すなわち、例えクラスメイトが話す英語スピーキングが稚拙なものであろうと、話すことができたことに注目してフィードバックを行うことが必要なのかもしれない。しかし、本研究において、英語スピーキング不安が、実際の英語の習得度によってもたらされるのか、自尊感情や情動的反応によるものなのかは判別できない。今後は個人の英語成績や習得度等も含めた検討が必要である。

7. おわりに

教員の資質・能力につながる自尊感情の向上も情動的反応性の克服も、外的要因である英語運用力とともに行う「外国語の理解」「外国語科指導法」の必要性が示唆された。そこで、本研究は、学生の内的要因を克服する方法として、近藤（2010）の「基本的自尊感情を育む共有体験」に着目する。例えば、プレゼンテーションをグループで作りと発表するなどの機会を与える等が考えられる。それでも、「外国語科指導法」等はコア・カリキュラムで示されているように、外国語の内容学的要素や外国語教授に絞られていて、教員の資質・能力に大いに着目していくことが難しい。そこで、大学カリキュラムマネジメントにより、他教科との関連で、自尊感情の向上・情動的反

応性の克服を行うのが望ましいと考えている。例えば、教職とは何かを扱う「教職入門」や児童心理を扱う「発達心理学」等との連携が想定できる。特に、自尊感情の高まりを促し、教師としての自覚に目覚めさせることができるであろう。

引用・参考文献

- Aida, Y. (1994). Examination of Horwitz, Horwitz, and Cope's construct of foreign language anxiety: The case of students of Japanese. *The Modern Language Journal*, 78(2), 155-168.
- Brown, H. D. (1973). Affective variables in second language acquisition. *Language Learning*, 23(2), 231-244.
- Horwitz, E. K. (1986). Preliminary evidence for the reliability and validity of a foreign language anxiety scale. *TESOL Quarterly*, 20(3), 559-562.
- Horwitz, E. K., Horwitz, M. B., & Cope, J. (1986). Foreign language classroom anxiety. *The Modern Language Journal*, 70, 125-132.
- Kondo, D. S., & Ying-Ling, Y. (2004). Strategies for coping with language anxiety: The case of students of English in Japan. *ELT Journal*, 58(3), 258-265.
- MacIntyre, P. D., Clement, R., Dornyei, Z., & Noels, K. (1998). Conceptualizing willingness to communicate in a L2: A situational model of L2 confidence and affiliation. *The Modern Language Journal*, 82(4), 545-562.
- MacIntyre, P. D., & Gardner, R. C. (1989). Anxiety and second-language learning: Toward a theoretical clarification. *Language Learning*, 39(2), 251-275.
- MacIntyre, P. D. & Gardner, R.C. (1991). Methods and results in the study of anxiety and language learning: A review of the Literature. *Language Learning*, 41(1), 85-117.
- Öztürk, G., & Gürbüz, N. (2014). Speaking anxiety among Turkish EFL learners: The case at a state university. *Journal of Language and Linguistic Studies*, 10(1), 1-17.
- Tsiplakides, I., & Keramida, A. (2009). Helping students overcome foreign language speaking anxiety in the English classroom: Theoretical issues and practical recommendations. *International Education Studies*, 2(4), 39-44.
- Woodrow, L. (2006). Anxiety and speaking English as a second language. *RELC Journal*, 37(3), 308-328.
- Yashima, T., Noels, K., Shizuka, T., Takeuchi, O., Yamane, S. & Yoshizawa, K. (2009). The interplay of classroom anxiety, intrinsic motivation, and gender in the Japanese EFL context. *Journal of Foreign Language Education and Research*, 17, 41-64.
- Young, D. J. (1990). An investigation of students' perspectives on anxiety and speaking. *Foreign Language Annals*, 23(6), 539-553.
- Young, D. J. (1991). Creating a low-anxiety classroom environment: What does language anxiety research suggest? *The Modern Language Journal*, 75(4), 426-437.
- 荒木紀幸 (2011). 『不安やストレスを下げ自尊感情を高める心理学－学校生活を充実させるために－』。あいり出版。
- 磯田貴道 (2007). 「英語スピーキング抵抗感尺度の作成」. 『広島外国語教育研究』, 11, 41-49.
- 教育職員養成審議会 (1999). 「養成と採用・研修との連携の円滑化について (第3次答申)」
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_shokuin_index/toushin/attach/1315387.htm) 2018年

1月4日確認

- 清田洋一 (2010). 「リメディアル教育における自尊感情と英語学習」. 『リメディアル教育研究』, 5 (1), 37-43.
- 熊田岐子・岡村季光 (2017). 「英語スピーキングに対する不安尺度作成－小学校英語の教科化に向けて－」. 『奈良学園大学紀要』, 7, 67-74.
- 近藤真治・楊瑛玲 (2003). 「大学生を対象とした英語授業不安尺度の作成とその検討」. *JALT Journal*, 25 (2), 187-196.
- 近藤卓 (2010). 『自尊感情と共有体験の心理学－理論・測定・実践』, 金子書房.
- 菅原健介 (1984). 「自意識尺度(self-consciousness scale)日本語版作成の試み」. 『心理学研究』, 55 (3), 184-188.
- 中央教育審議会 (2016). 「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について ～学び合い, 高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～ (答申)」.
- 東京学芸大学 (2017). 文部科学省委託事業『英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業 平成28年度報告書』.
- 名畑目真吾 (2016). 「小学校外国語活動の指導に対する教育学部生の意識－意識構造と個人差を焦点に－」, 『共栄大学研究論集』, 14, 217-232.
- 福和寛晴・中津樁男 (2014). 「小学校教員を志望する大学生の小学校外国語活動に対する不安度の調査」. 『愛知教育大学紀要』, 63, 203-210.
- ベネッセ教育総合研究所 (2011) 『第2回 小学校英語に関する基本調査 (教員調査)』.
(<http://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=3179>) 2017年7月15日確認.
- 松尾直博・新井邦二郎 (1998). 「児童の対人不安傾向と公的自己意識, 対人的自己効力感との関係」. 『教育心理学研究』, 46 (1), 21-30.
- 松宮新吾 (2013). 「小学校外国語活動担当教員の授業指導不安にかかわる研究 (授業指導不安モデルの探求と検証)」. 『関西外国語大学研究論集』, 97, 134-149.
- 松宮奈賀子 (2010a). 「小学校外国語活動における児童の不安に関する実態調査」. 『広島大学大学院教育学研究科紀要』, 第一部, 学習開発関連領域, 59, 107-114.
- 松宮奈賀子 (2010b). 「小学校教員を目指す学生の『外国語 (英語) 活動に関する演習科目』履修がもたらす学生の変容 (特集 英語教育)」. 『クオリティ・エデュケーション』, 3, 111-134.
- 松宮奈賀子 (2013). 「外国語活動の指導に求められる英語運用力向上のための試み－英語スピーチ練習の可能性－」. 『広島大学大学院教育学研究科紀要』, 第一部, 学習開発関連領域, 62, 81-88.
- 物井尚子 (2011). 「『外国語活動』授業力を備えた教員養成のためのシラバスに関する一考察」. 『千葉大学教育学部研究紀要』, 59, 21-27.
- 文部科学省 (2016). 「資料4-1 教員に求められる資質能力等について (近年の提言等より抜粋)」
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/002/siryo/_icsFiles/afieldfile/2016/03/25/1367367_06.pdf#search=%27%E6%95%99%E5%B8%AB%E3%81%AE%E8%B3%87%E8%B3%AA%E8%83%BD%E5%8A%9B%27) 2018年1月4日確認
- 文部科学省 (2017a). 『小学校学習指導要領解説 外国語編』.
(http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/06/21/1387017_11_1.pdf) 2017年6月29日確認
- 文部科学省 (2017b). 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』.

(http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afldfile/2017/06/21/1387017_13_1.pdf) 2017年7月13日確認

山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 「認知された自己の諸側面」. 『教育心理学研究』, 30, 64-68.

リアリー, M.R. (2001). 「自尊心のソシオメーター理論」. コワルスキ, R.M. & リアリー, M.R. (編著) 安藤清志・丹野義彦 (監訳) 『臨床社会心理学の進歩 実りあるインターフェースをめざして』, 北大路書房, pp.222-248.